

コロナ禍において、喜久寿苑ではどのように対応してきたか

岡田仁志¹ 山口真紀²

喜久寿苑 苑長¹ 看護長²

令和2年1月に、国内初の新型コロナウイルス感染症が確認された。最初の感染の波は令和2年4月11日をピークとする流行の第1波であり、その後、第2波から第5波と流行が続き、そして感染力の強い第6波のオミクロン株では急激な感染拡大が始まり、令和4年2月3日には全国で初めて10万人を突破した。

喜久寿苑では、当初から新型コロナウイルス感染症への対策を講じてきたが、第6波で大規模なクラスターを経験したので報告する。

令和4年1月27日に、職員に対する集団唾液PCR検査結果、陽性者が1名発覚により、そこから大規模なクラスターへと発展する。同年3月4日には収束したが、総計入所者42名、職員21名が感染し、各病院の病床がひっ迫している中、入所者5名は中津病院へ入院、入所者37名は施設内療養にて治療開始となり、配置医師による往診に加えて中津病院からの派遣医師に

よる回診を実施し、観察を徹底した。職員においては、感染して少ない人数での業務であったため、老健施設のライフケア中津（同じ複合施設内）から応援をいただいた。

高齢者施設の入所者は重症化リスクが高く、大規模なクラスターが発生したことで、入所者や職員の状態、施設運営にとっても多大な影響を受けた。特にゾーニングでの入所者にとっては、面会禁止、生活環境の変化により、社会的つながりが失われ、認知症の悪化へとつながったケースも少なくない。職員も初めての取り組みにて、入所者の生命を守るのに必死であった。

今後は、感染を持ち込まない対策、次の感染拡大への備えとして、ゾーニング等の感染管理、職員の確保等、更なる感染対策を取り組みつつ、このクラスターからの振り返りとして、入所者へ精神的な関わりも忘れてはならない。

